

中国語空間辞“上”の意味拡張及びその動機付け

—中、日、英語空間辞の意味拡張におけるタイポロジー的特徴を試みる—

韓 涛

要 旨

単一の形態と結びついている複数の意味をどのようにして統括的にモデル化できるかは、言語学のみならず、(発達)心理学、自然言語処理などの研究分野においても一つの中心課題であった。

本稿では、多義説の立場から、Tyler and Evans 2001、2003で考案された「決まった手順に基づく多義説 (PRINCIPLED POLYSEMY)」という分析方法を用い、中国語空間辞“上”の意味拡張及び動機付けを中心に検討した。また、認知言語学の観点から、中、日、英語空間辞の意味拡張におけるタイポロジー的特徴も指摘した。しかし、本稿のアプローチは理論的アプローチであるため、心理的アプローチとはどこまで合致するかについては今後の課題である。

キーワード：認知文法 多義性 意味ネットワーク 空間辞 上

1. はじめに

単一の形態と結びついている(明確に区別できる)複数の意味をどのようにして統括的にモデル化できるかは、言語学のみならず、(発達)心理学、自然言語処理などの研究分野においても一つの中心課題であった。特に、言語学では、この汎言語的な現象は、これまで主に三つのアプローチのもとで研究が進められてきた。一つ目は、いわゆる同音異義説(homonymy)である。複数の(独立した)意味が、同一音形と結び付くのは単に恣意的であるに過ぎず、ゆえに複数の意味同士はまったく無関連であると主張する立場である。二つ目は、いわゆる単義説(monosemy)である。同一音形に結び付いていてかつ独立に存在している意味構造は、抽象化されたコア的な意味のみで、ほかの意味・用法は、具体的な文脈的に派生した変異体にすぎないという立場である。三つ目は、いわゆる多義説(polysemy)である。この多義説の立場にしたがえば、単一形態に結び付いている複数の意味群の間は、なんらかの形で関連づ

けられているとされる。言い換えると、その複数の意味の発生は、決して同音異義説が主張するように恣意的なものではなく、むしろ人間のもつ一般的な認知能力と運用能力によって動機づけられうるものと考えている¹。

しかし、多義説以外の二つのアプローチは、いずれもうまくモデル化することはできず根本的に限界がある（詳しくは韓2007参照）。そこで、本稿では、多義説の主張の妥当性を検証することも含めて、きわめて複雑な意味体系をもつ中国語空間辞“上”の意味拡張及びその動機付けを検討し、その意味ネットワークを構築することを試みる。と同時に、もう一つの目的は、空間辞の意味拡張のプロセスにおける認知的基盤及び制約について、Langackerの認知文法の理論枠組みにおいて統一的な見解を提案することである。

なお、本稿の構成は以下の通りである。2節では、これまで空間辞の多義性を分析するに当たって、用いられたモデルを概観し、その主な問題点を指摘する。3節では、Tyler and Evans 2001、2003で考案された「決まった手順に基づく多義説 (PRINCIPLED POLYSEMY)」という分析方法を用い、中国語空間辞“上”の独立義を認定し、意味ネットワークを構築する。4節では、認知言語学—とりわけ認知文法のいくつかの基本的主張を援用し、空間辞の意味拡張の認知的基盤及びその制約を明らかにする。

2. 先行研究及びその問題点

2.1 意味成分抽出論²

意味成分抽出論には、Bennett 1975が代表する古典的意味成分抽出論（田中1997では、旧来のコア理論と呼ばれている）と田中1990、1997が代表する新しいコア理論がある。

前者は、「My hand is over the table」のような例文から、英語空間前置詞 over の基本形（コア）となる [LOCATIVE [superior of table] place] を抽出し、さらに SOURCE、PATH、GOAL という意味成分を加えることによって、新たな意味を生じさせる方法をとったが、少なくとも次の2点が指摘できよう。(i) over の基本形から、up や above と区別できない。(ii) 都合の良い例文から意味成分を抽出したため、over の全体の意味をカバーできない。

一方、後者の場合は、認知文法からいくつかの道具立てを借りて問題解決を試みた。具体的には、複数の意味構造の背後にある（コア的な）不変の構造 (invariant structure) とみなす「半円形の経路」を抽出し、部分焦点化 (segment profiling) を行うことによって、異なる over の意味を生成させようとする方法である。これは、のちの Dewell 1994による分析と非常に似ているが、複数図式の存在を認めるか（つまり、多義説の立場を取るか）、それとも単一のコア図式のみを認めるか（つまり、

単義説の立場を取るか) に関しては、両者は根本的に異なっている。しかし、英語前置詞 *over* の意味は、上記の四つの意味以外に多種多様である。たとえば、〈再帰〉 (Reflexive) や 〈反復〉 (Repetition)、〈より多く〉 (More)、〈超過〉 (Over-and-above) 〈優先〉 (Preference) などの意味は、田中1990のコア図式から直接に焦点化のプロセスを経て得られることはできない。そこで、コア・スキーマを回転させたり、変形させたりといった操作が要求される。このことは、経験的実在性を考慮せずに、*over* のすべての意味・用法を一つのコア・スキーマに還元させるというこの種の手法には根本的に限界があるということの意味するようと思われる。仮にそれが可能としても、複数の意味同士の拡張関係が自動的に問題視されなくなるので、分析手法としてやはり不十分であると言わざるを得ない。

2.2 複数図式論

2.2.1 最大細目化 (THE FULL-SPECIFICATION APPROACH)

Lakoff 1987が用いた最大細目化というアプローチは、簡単に言えば、ランドマーク (LM = landmark) 又はトラジェクター (TR = trajector) の計量的な特徴や、TR と LM とは接触関係にあるか否かなどが、*over* のもつ意味の確立に貢献しているという立場である。しかし、この種のアプローチは、Tyler and Evans 2001が指摘したように、人間がもつ背景知識 (background knowledge) を十分に配慮しなかったため、大きな問題点をかかえている。このことを言い換えると、この最大細目化のアプローチは、様々な文脈や場面における人間の解釈や認識の役割を最小限にするアプローチでもあると言える (このアプローチに関するほかの問題点について、さらに韓2007: 78-86を参照されたい)。

2.2.2 部分細目化 (THE PART-SPECIFICATION APPROACH)

Lakoff 1987で用いられた最大細目化のアプローチと対照的に、Kreitzer 1997で用いられたアプローチは部分細目化と呼ばれている (cf. Tyler and Evans 2001)。具体的には、Kreitzer 1997では、イメージ・スキーマの複雑性を、(i) component schema、(ii) relational schema、(iii) integrative schema、という三種のスキーマを規定している。さらに、(i) component schema のレベルにおいて、TR-LM のもつ vertical (垂直性) や extended (広がり性) といった素性は認められる。しかし、これらの素性は、(ii) relational schema のレベルにおいて、ある種の関係を構成し、再分析されることによって、*over* の意味を決定することになる (cf. Kreitzer 1997: 301-304)。

この点において、Lakoff 1987に比べてより柔軟性があるため、評価されるべきところである。しかし、何を基準に、*over* をこの三種類に分けたのかについて、Kreitzer はまったく述べていない。また、この三種類の *over* はそれぞれどういう関

係を有しているのかも記されていない³。さらに、どの意味が over のプロトタイプの意味なのかについて、研究者の間に、共通する認定基準は必ずしも存在しているわけではない (cf. Sandra and Rice 1995)。そのため、最終的に構築された意味ネットワークもかなり異なっている。

以上のことは、空間辞の多義性を分析する際に、一定の分析手順、さらに空間辞の独立義を決める際に、なんらかの認定基準が必要不可欠だということを意味しているように思われる。以下では、Tyler and Evans 2001、2003で考案された「決まった手順に基づく多義説 (PRINCIPLED POLYSEMY)」という分析方法を用い、中国語空間辞“上”の独立義を認定し、意味ネットワークを構築する。

3. 中国語“上”の意味ネットワーク

2節で英語 over の先行研究及びその主な問題点を検討したことを踏まえて、この節では、中国語空間辞“上”の多義分析を試みたい。具体的には、(1) 本稿が用いる分析手順と分析方法を簡単に説明し、(2) “上”の各独立義とその相関関係を検討する。

3.1 分析手順

本稿では、初山2001と Tyler and Evans2003などを踏まえ、中国語空間辞“上”の多義性に関する分析手順を以下の通りに示す。

- ① 認定基準による“上”のプロトタイプ義の規定
- ② 認定基準による“上”の複数の独立義の規定
- ③ “上”の独立義同士の相関関係に関する規定
- ④ “上”の(動的)意味ネットワークの構築

3.2 分析方法

英語前置詞 over に関するこれまでの研究からも分かるように、どの意味を中心義(ないしプロトタイプ義)として認定するかによってその意味ネットワークはだいぶ異なってくる。このことは、中心義に関してなんらかの認定基準が必要であることを意味しているように思われる。Tyler and Evans 2001では、4つの方法を提案している。

(i) earliest attested meaning、(ii) predominance in the semantic network、(iii) relations to other prepositions、(iv) grammatical predications. さらに、Tyler and Evans 2003で新たに提案された「複合語の中での使用」を加えて、全部で5点である。

もう一つの重要な課題は、複数の確立した意味の認定である。具体的に言うと、どの意味を独立義と見なすのか、どの意味を文脈や場面に沿って一時的な解釈として見るのか、連続的かつ動的な視点から見れば、両者の間に絶対的な境界線を完全に客観的には引けないものの、ある程度の主観性を抑えてかつ両者を柔軟的に見きわめる一

定の認定基準は存在するはずである。Tyler and Evans 2001では、その基準を次のように述べている。

First, accepting the standard assumption that the primary sense coded for by prepositions is a particular spatial relation between a TR and an LM (although we will nuance what 'spatial' means), for a sense to count as distinct, it must involve a meaning that is not purely spatial in nature and/or in which the spatial configuration between the TR and LM is changed vis-à-vis the other senses associated with a particular preposition.

Second, there must be instances of the sense that are context-independent, instances in which the distinct sense could not be inferred from another sense and the context in which it occurs.

(cf. Tyler and Evans 2001 : 731~732)

まず、第一の認定基準を確認してみよう。空間辞の複数の意味は、一つの中心義のもとで組織されるのが一般的な認識である。この中心義は、必ず TR-LM のなんらかの空間的配置関係を表しているのも明白のことであろう。もし、その拡張のプロセスにおいてこのような（中心義のような）空間的位置関係が変わったとしたら、新たな空間的配置関係がもたらした意味は、独立義の候補としてもととの意味と区別されるべきであろう。また、もし、空間的位置関係がやがて非空間的配置関係に変わったとしたら、その非空間的配置関係がもたらした意味も、独立義の候補として意味ネットワークに組み込まれるべきであろう。

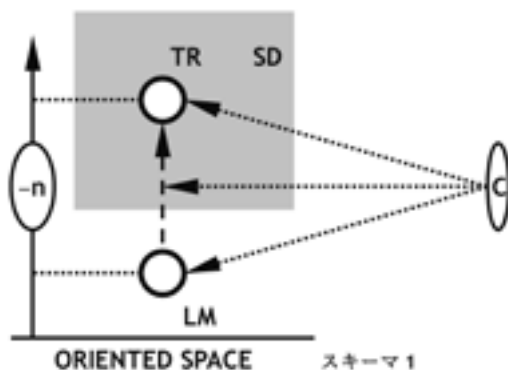
次に、第二の基準は、候補として選ばれた独立義が使われている文脈の中から、その意味を代替するような別の意味が存在しなければならない。と同時に、その候補としての意味は文脈からいかなる推論によって導き出せない例がなければならない。そういう意味では、空間辞の独立義として認定するために、第一の基準と第二の基準を両方クリアしなければならない。以下では、この二つの認定基準を用いて、中国語空間辞“上”のプロトタイプ義と独立義（時間的な用法を除く）を検討していきたい。

3.3 “上”の原図形とプロトタイプ義

本稿は、中国語空間辞“上”のプロトタイプ義を、〈トラジェクターは、ランドマークより高い位置にあり、かつ両者は非接触の関係である〉と規定する。

では、このプロトタイプ義を、図-1を参照しながら、説明してみる。まず、図-1に含まれている基本的な認知対象を簡単に確認しておく。方向付けられた空間（ORIENTED SPACE）に、二つのモノが存在する。そのうち、参照点機能として、別個のモノの存在をより際立たせるモノは、ランドマーク（LM）と表示され、ランドマークに比べてよりプロファイルされているモノはトラジェクター（TR）と表示されている。一方、上向きの実線の矢印は、垂直の方法を表し、縦長のサークルで囲まれた-nは、基準（norm）を示している。図-1では、TRとLMの位置関係は、

図-1 空間辞“上”の原図形⁴



同時にこの基準の尺度に投影されている（上向きの垂直の実線の矢印と、TR-LM とを結ぶ破線はこのことを表している）。もちろん、場合や状況によって、この基準の尺度は背景化されることも考えられる。また、右側にある縦長のサークルで囲まれた C は、認知主体を表している。さらに、認知主体から、TR-LM への破線の矢印は認知主体の視線にかかわるある種のスキヤニングである。この時の視線の移動は、TR から LM への一方向である（LM から TR への破線の矢印は、このことを示している）。また、SD (search domain) によって示された領域は、TR が存在するのが可能な空間、つまり探索領域を表している。この探索領域は、一般に言語表現によって、明示されない場合が多いが、場合によってプロファイル・シフトによって前景化されることもある。そして、ここで注意すべきは、原図形において、TR-LM の非時間的な関係が表されているが、拡張のプロセスにおいては、この非時間的な関係からプロセスの関係へと拡張されていく場合も考えられるが、このことは、図-1 には表示されていないことである。さらに言えば、場合（たとえば〈再帰〉）によって、TR-LM とは同一のモノ（の部分）である可能性もある。

次に、Tyler and Evans 2001、2003で規定された英語の over と比較しながら、中国語空間辞“上”のプロトタイプ義について説明しよう。〈トラジェクターはランドマークより高い位置にある〉ということに関しては、Tyler and Evans 2001、2003で規定した英語 over の第一義と一致している。しかし、TR と LM の接触問題に関して、違いが生じる。

まず、Tyler and Evans 2001、2003では、トラジェクター（もしくはランドマーク）が、ランドマーク（もしくはトラジェクター）の影響を受ける圏内にあると規定されている。このことを換言すると、つまり、TR-LM に関する接触は無指定であるということになる。Tyler and Evans 2001、2003の説明によると、TR と LM の空間的配置関係—接触関係が、具体的な文脈ないしは場面で解釈されることになるならば、原図形にこの種の接触の情報を持ち込むべきではないとされる。その意味で、中国語も同様である。原図形は非常に抽象的なものであるゆえに、たとえば、「A は B の上で

ある」かつ A と B に関する情報を、具体的に指定しない抽象的な場合は、A と B はもちろん接触しても接触しなくてもどちらでも構わない。

しかし、接触しない場合と接触する場合を比較すると、前者の場合は、より単純な概念、つまり〈位置〉の問題にしかかかわっていない。一方、後者の場合は、〈位置〉の問題だけでなく、〈支持〉の問題もかかわっていて、より複雑な複合的な概念にかかわっていることが分かる。すなわち、前者の場合は、より無標であることが分かる。認知言語学では、一般に無標のものをプロトタイプに近いものとして考えるという立場をとっている (cf. Lakoff 1987)。もう一つの理由がある。たとえば、「A は B の上である」は、単純に位置を表すときに、「B は A の下にある」と書き換えることができる (もちろん、このときにはどちらが TR なのか、どちらが LM なのかは逆転している)。しかし、TR と LM が接触すると、〈支持〉関係が生まれ、このような書き換えはできなくなる場合もある。

- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| (1) a. 壁画在沙发上。(絵画はソファの上にある) | b. 沙发在壁画下。(ソファは絵画の下にある) |
| (2) a. 书在笔记本上。(本はノートの上に置いてある) | b. 笔记本在书下。(ノートは本の下に置いてある) |
| (3) a. 铅笔在书上。(鉛筆は本の上に置いてある) | b.? 书在铅笔下。(本は鉛筆の下に置いてある) |
| (4) a. 山上有只熊。(山の上に熊がいる) | b.* 熊下有座山。(熊の下に山がある) |

例文 (1) の (a) と (b) のいずれの場合も TR-LM との非接触の関係を表している。しかも、(a) と (b) はパラフレーズ関係にあって、いずれも自然な文である。一方、(2) は、TR-LM との接触関係を表している。たとえば、(開いた) 本はノートの上に乗っかっているような状態を想像してみよう。(a) と (b) には、〈本〉と〈ノート〉は、どちらを TR として捉えるか、どちらを LM として捉えるかこそが異なっているが、いずれの場合も自然に聞こえる。しかし、(3) の場合はどうだろう。一見して、例文 (2) と似ているように見えると思われるかもしれないが、例文 (3) の (a) の場合は、問題ないが、(b) は疑問符が付いているように自然さ (許容度) は (a) に比べるとだいぶ落ちる。なぜなら、鉛筆が参照点としてうまく機能しないからである。一般的に、小さい、動きやすい、固定されないものはターゲットとして解釈される傾向がある (劉1994を参照)。この場合は、認知上、鉛筆は自動的にターゲットとして働くようになる。そのため、例文 (3) の (b) の場合は不自然と感ずるのである。言い換えると、われわれは、一般に例文 (3) の (a) を選択する傾向がある。このことは例文 (4) において、さらに顕著に表れてくる。

以上、例文 (1) - (4) から分かるように、TR-LM の接触関係は場合によって、「上-下」のパラフレーズ関係が保たれなくなることがある。このことは、純粋な〈空間的位置づけ〉(上下の対称性) から〈存在-場所〉(上下の非対称性) への拡張のプロセスにおいて見られる現象である。この種の「上下の非対称性」にかかわる現象は、

厳密にいうと一種の主観化のプロセスであるといえる。以上のことを踏まえて、本稿では、“上”のプロトタイプ義には、単純な〈空間的位置〉という中心義しか認めない立場をとる⁵。

3.4 〈尺度〉へのイメージ・スキーマ変換

この節では、原図形図-1から〈尺度〉義へのイメージ・スキーマ変換について見てみよう。

図-2 〈上・中・下〉⇔〈尺度〉のイメージ・スキーマ変換

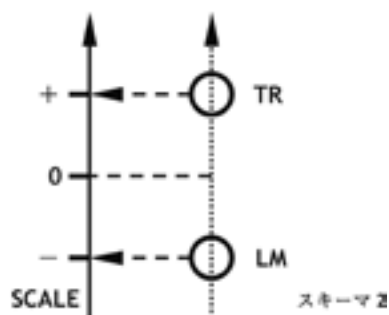


図-2では、右側に〈上下〉のイメージ・スキーマが描かれている。一方、左側に〈尺度〉のイメージ・スキーマが描かれている。また、両者を結ぶ破線の矢印は〈上下〉のイメージ・スキーマから〈尺度〉のイメージ・スキーマへのメタファー的写像を表している。さらに、図-2から、LMより高い位置にあるTRは、スケールの+に対応し、一方、TRより低い位置にあるLMは、スケールの-に対応するのが分かる。ここで注意してほしいのは、図-2には、スケール0に対応するTRとLMの間に存在するモノ、つまり〈中〉の概念は描かれていないが、場合によって、この〈上下〉の間にある〈中〉の概念は明示化されることもということである。さらに言えば、図-2のように、〈上〉は常にスケールの上の+に対応し、〈下〉は常にスケールの上の-に対応しているとは限らない。ここでの表示はあくまでも相対的な表示である。また、両者は常に垂直方向において対応しているとも限らない。

以下の具体事例を考えてみよう。

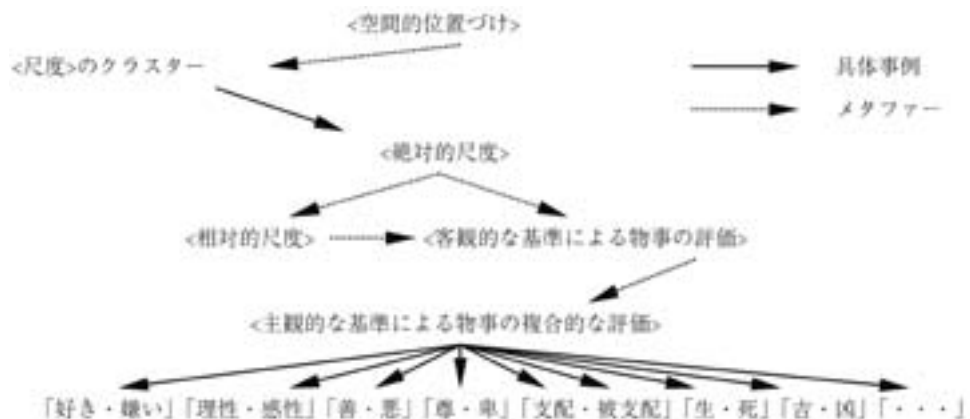
- (5) 今天的气温在零上/下3度。(今日の気温は摂氏/マイナス3度)
- (6) 今年的销售额在去年之上/下。(今年の売上は去年以上/以下だった)
- (7) 在班里他的成绩属上等/上中等/上上等、中等/中上等/中下等、下等/下中等/下下等
(彼の成績はクラスの中で上の方/上の中での中ぐらい/上の上、中の方/中の中での上の方/中の中での下の方、下の方/下の中での中ぐらい/下の下に入っている)
- (8) 富士苹果在众多的苹果的品种中属上等/中等/下等。

（「ふじ」はたくさんのリンゴの品種の中では上／中／下のクラスに入っている）

例文（5）における“上”、“下”が、それぞれ零度を基準に、温度計のスケールのプラス値、マイナス値に対応していることから分かるように、〈絶対的尺度〉、つまり文字通りの客観性かつ具体性の高い〈尺度〉を表している。これに対し、例文（6）は、人間のもつ比較能力による〈今年の売上額〉と〈去年の売上額〉との比較の結果を表している。これは一見して例文（5）と同種のものに見える。しかし、認知プロセスの立場から見れば、両者には根本的な違いはある。例文（6）の場合は、例文（5）のように直接〈尺度〉へのイメージ・スキーマ変換を行うことができず、〈金額の多さ〉と〈上・下〉の間に経験的関連づけから〈量の多さ〉という別のイメージ・スキーマ変換を介さなければならない。また、例文（5）には、特定した基準（温度計の零度）が存在するのに対し、例文（6）には、このような絶対的基準が存在しない。むしろ、認知主体が日常的な経験に基づいての比較した結果に過ぎない。そのため、例文（5）に比べてより主観化された〈相対的尺度〉であると言える。では、例文（7）はどうだろう。（7）では、何らかの基準（例えば、ある試験の平均点など）による〈クラスの中での成績のよさ〉を表している（つまり、ある種のプラスとマイナスから物事の評価や判断にかかわる基準へと拡張されていく）。また、例文（5）、（6）と違って、〈上・中・下〉を用いて、いろいろな言い方が可能である。つまり、例文（7）の場合、認知主体である話者は、比較の基準を自由に作るができる。その意味で例文（8）も同様である。しかし、（8）は、（7）と違って、単なる数値と数値との簡単な比較による評価ではなく、（味、色、形などから）認知主体の主観によるモノとモノの複合的な比較であることを表している。そういう意味では、〈上・中・下〉は、より認知主体の主観的な判断にゆだねられる可能性が高くなる。

以上の考察からも分かるように、〈上下〉は単なるスケール上のプラス値やマイナス値を表しているだけでなく、〈尺度〉のイメージ・スキーマを介してメタファー的

図-3 “上”の〈尺度〉義にかかわる連続的な拡張のプロセス及びその動機づけ



に〈良し・悪し〉にかかわるモノ・コトを判断する基準へと拡張されていくのである。また、この種の〈尺度〉のイメージ・スキーマを介して、われわれ、はじめて〈理性・感性〉にかかわる感情世界、〈好き・嫌い〉にかかわる心理活動、〈重い軽い〉、〈正しい・正しくない〉にかかわる主観的な尺度、〈支配・被支配〉や〈尊・卑〉にかかわる社会的な地位、〈生・死〉や〈吉・凶〉にかかわる外部世界の見方などの抽象的領域にかかわる（両極的な）概念を理解することができる⁶。以上のことを図-3に示しておく。

3.5 サーチ・ドメインの前景化

中国語空間辞“上”の意味拡張のプロセスにおいては、様々な焦点化にかかわる認知主体の解釈のモードがかかわっている。この節では、その中の一つであるサーチ・ドメイン（ないしは探索領域）の焦点化を取り上げて検討してみたい。3.3節で“上”のプロトタイプ義である〈空間的位置づけ〉について見たが、その中で“上”がもつ〈場所・空間〉のサーチ・ドメインは一般に背景化され、叙述の直接的な対象として明示されないため、それ自体について問題にされなかった（図-1参照）。しかし、場合や状況によって、この種の探索領域は前景化されることもありうる。では、以下の例文とともに見てみよう。

- (9) 房子上**笼罩**着一片**乌云**。(家の上空は雨雲で覆われている)
- (10) **树上**有一群**鸟**在**飞**。(木の上をたくさんの鳥が飛んでいる)
- (11) **桌子上**堆**满**了**书**。(机の上に本がたくさんおいてある)
- (12) 山上**长满**了**花草**。(山の上に草花がたくさん生えている)
- (13) 天花板上有一只 **蚊子**。(天井に蚊がいる)
- (14) 身上/手上**没有** **钱**。(お金を持っていない)
- (15) 高高在上。(高く高く上の方にいる)
- (16) 上有天堂、下有**苏杭**。(天界に極楽があり、人間界に蘇州、杭州がある)

まず、例文(9)、(10)は、TRとLMの非接触の場合である。(9)は、雨雲(TR)が、家(LM)に覆ってくる状況である。このときの“上”は、単なるTRとLMの位置づけの問題というより、LMを覆う空間・場所それ実体が問題(話題)になっていると言ってよい。これは、一見して(10)と同じ状況に見える。しかし、(10)の場合は、前景化された空間は、LMである木を覆う形ではなく、木の上方空間領域内に限定されているということから、両者は極めて連続的であるといえる。

一方、例文(11)と(12)はTRとLMの接触の場合である。例文(9)と(10)と違うのは、TRとLMの関係が、単なる〈空間的位置づけ〉の問題ではなく、〈存在物-存在場所〉の関係に変わっているところにある。したがって、ここで問題になっ

た〈空間・場所〉は、TRが存在する探索領域というより、むしろLMのもつ〈空間・場所〉義へとプロファイル・シフトされたと言った方がよい。例文(11)では、「机」はモノとして解釈されるのではなく、机の天板の部分がTRである本の存在する場所として前景化されている。同様に、例文(12)では、「山」も草花が存在する空間・場所として解釈されている。ただし、例文(11)と違ってのは、山の一部ではなく、その全体が前景化されているのである。しかし、人間の焦点化能力から見ると、両者の区別は連続的なもので絶対的なものではない。

また、場合によって、例文(13)のように、LMの下方の空間がターゲットとして捉えられることも考えられる。しかし、このときの空間・場所は、もともと“上”のサーチ・ドメインがプロファイル・シフトによって拡張されてきたものなので、TRとLMの位置づけは、“下”によって特徴付けされているにもかかわらず、“上”で表現される要因になっている。同様に、たとえば、「壁に絵画が飾ってある」という状況でも、〈付着〉として“上”で表現されるのである。では、例文(14)の慣用表現はどうだろう。この場合は、例文(11)と(12)に比べて、さらにプロファイル・シフトによって、LMが支配される空間が前景化され、そして、メタファー的な拡張を介して〈所有〉の用法が生まれている。しかし、注意してほしいのは、ここにはプロファイルとアクティヴゾーンの〈ずれ〉と呼ばれる一種のメトニミー現象が見られるのである⁷⁾。例文(14)の中でプロファイルされている“身上”、“手上”が指す人間の身体部位そのものはターゲットとして理解されているのではなく、それを一種の参照点としてその背後にある人間自体がターゲット(ないしはアクティヴゾーン)として理解されているのである。以上見てきた前景化されたサーチ・ドメインは、いずれの場合も具体的な物理的空間や場所そのものであった。しかし、生きた日常言語の使用には、非物理的空間や場所あるいは可能世界の場合も考えられる。例文(15)では、“上”によって前景化されたサーチ・ドメインは、社会的な〈尊・卑〉にかかわる空間・場所に拡張されている。一方、例文(16)の場合は、〈極楽〉という想像上の理想空間が焦点化されている。

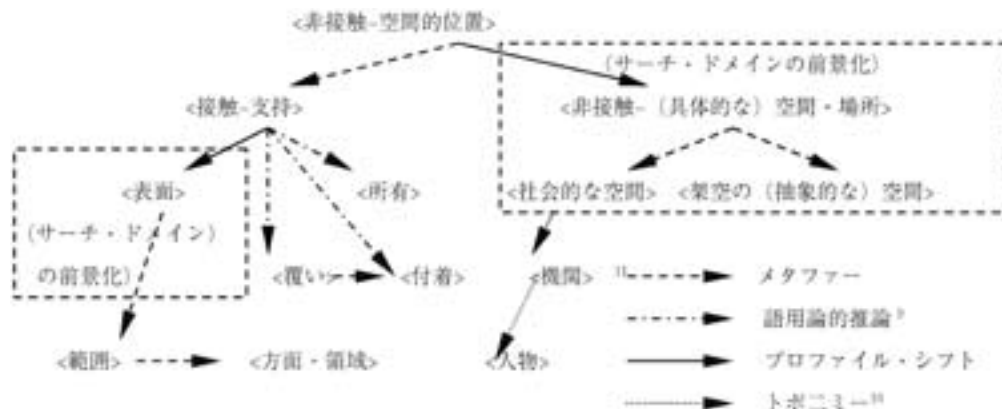
3.5.1 サーチ・ドメインの前景化にかかわるメタファー義

前節では、“上”のサーチ・ドメインの前景化にかかわる拡張のプロセスについて検討した。そして、その拡張のプロセスにおいてプロファイル・シフトによって成立したいくつかの概念を取り上げてみた。しかし、この種の拡張は決して具体的な概念領域に限られるものではない。この節では、さらに〈方面・領域〉義を取り上げて見てみよう。

(17) 一定要学好**书本上的东西**。(教科書に書いてある知識をちゃんと勉強しなければならない)

(18) 他在**语言学上**是**专家**。(彼は言語学に関する専門家である)

図-4 サーチ・ドメインの前景化にかかわる“上”の意味変容およびその動機づけ



以上の例文は、共に“上”に関する非空間的な用法において共通している。われわれは、具体的な空間的概念を介して、例文 (17)、(18) の場合を、抽象的な〈存在-場所〉として理解することができる。たとえば、(17) では、問題となる〈知識〉はそのまま〈本〉の上に置いてあるわけではない。むしろ読む人によって、いろいろな理解を経て得たものことである。言い換えると、このときの“上”は、例文 (11) のような単純な〈支持〉義ではなく、むしろターゲット（この場合は〈知識〉）の〈出处〉が焦点化されている。したがって、このときの TR-LM の配置関係は一種の抽象的な〈内包〉概念に近い。たとえば、(17) の中の“上”は、“里”に書き換えられても文としては依然成立する。同じように「那个新闻是从杂志上 / 里得知的(そのニュースは雑誌から知った)」もこの種の含意関係が見られる。しかし、〈認知のレベル〉から見るときに、両者は厳密に区別されることになる⁸。ところが、例文 (18) はどうだろう。(18) の中の前置詞“在”は、TR のある種の範囲（この場合は「言語学」）を確定する役割をになっている（ここで範囲とは、参照点能力における参照点によって限定されるターゲットの支配領域 (dominion) 或いはフォコニエがいうスペース)。一方、後置詞“上”の役割は、従来では、前の非場所名詞を場所化するという立場がとられてきた。しかし、本稿では、句構造レベルにおいて、“在 + NP + 上”が具体的な空間領域から抽象的概念領域へとメタファー的に拡張されていく過程として見なすことにする。また、(17) では、TR-LM とは、基本的に「容器-内容物」の関係であるのに対し、(18) では、より主観性の高い文の成立の背景的条件として解釈される。以上のことを図-4 にまとめてみる。

3.6 “上”の自動性

この節では、主に“上”の自動性（ここで、自動性と自動詞を区別することにする。以下の考察では、すべて必ずしも自動詞ではないことに注意されたい）に焦点をあてながら、拡張のプロセス及びその動機付けと合わせて検討してみたい¹²。

3.6.1 〈上へ、前へ移動の経路〉義

例文(19)は移動主体(“影迷”)が意図性をもつ内在的なエネルギーによる自動構文である(図-5参照)。しかし、(20)は認知主体(観察者)そのものは物理的に移動しているわけではない。移動として解釈されるのは、その体の一部—観察主体の視線の移動である。このときの〈経路〉は、認知主体のスキャニングによるメンタルパス(Mental Path)としてメタファー的に理解される。すなわち、(20)は、(19)からの一種の比喩的拡張構文と見なすことができる。さらにいえば、(20)は、移動の終点が背景化されている(19)と違って、視線の移動だけではなく、視線の到達も含意されている。

(19) 影迷一拥而上，将好莱坞女星围住。(ファン皆一齐にハリウッドスターを囲んだ)

(20) 她看上去只有十几岁。(彼女は十代にしか見えない)

図-5



図-5では、太線のサークルは実際の移動主体を表し、サークルの中の⇒は、移動主体の内在的なエネルギーが原因であることを示している。また、移動主体のもとの場所は、破線によって表されている通り、背景化されている。一方、移動先および移動主体の変化は、括弧に入れてある。このことは、この種の問題は含意されないことを意味する。つまり、この〈上へ、前への移動の経路〉義には、→で示されている方向付きの経路(path)それ自体は焦点化されていることが分かる。また、図-5では、前への移動しか表していないが、場合によって、〈上への移動〉も考えられる。例文(21)と(22)を見てみよう。

(21) 河水上涨了。(川の水位が上がった)

(22) 股票不停地地上长。(株価は値上がりし続けている)

例文(21)は、移動主体(“河水”)が意図性をもたない外在的なエネルギー(豪雨や洪水など)による自動構文として(19)と区別することができる。また、(19)と違って、この場合の移動の経路に関する方向性は上向きの方角への経路である。しかし、(19)と同様に、移動の終点や移動主体の変化の結果は、背景化されている(あるいは問題にされていない)。一方、(22)は、空間領域内での移動を表す(21)からの抽象領域内での状態変化にかかわるメタファー構文として考えられる。山梨2000:231によると、事態認知において状態の変化は、メタファー的に場所の変化として捉えら

れるからである。しかし、この種の内容メタファー的な拡張において、いわゆる「不変性仮説」にしたがって、起点領域におけるイメージ・スキーマ構造は、目標領域のイメージ・スキーマ構造と矛盾しないことに注意する必要がある。表1には、二つのことなる概念領域における構造上の類似による対応関係が示されている。つまり、(22)は(21)からメタファーを介して拡張された構文といえる。

表1 「川の水位」という起点領域から「株価」という目標領域へのメタファー的拡張

川の水位（非意図性）-----	→ 株価（非意図性）
川の水位が上がる前の位置（背景化）-----	→ 株が値上がり前の状態（背景化）
川の水位は豪雨などによって位置が変化し始まる-----	→ 株価は投資家によって動き始まる
川の水位は垂直方向へ上昇する-----	→ 株価は直線状に上昇する
川の水位はどこまで上昇するかは予測不能-----	→ 株価はどこまで上昇するかは予測不能
等等	等等

3.6.2 〈目的地への移動〉

〈上へ、前へ移動の経路〉義では、移動主体の移動先は背景化して明確に示されていない。しかし、われわれは、一般的な〈移動〉について考えるとき、〈起点〉-〈経路〉-〈目的地〉というようなシナリオタイプのイメージ・スキーマをもっているはずである。したがって、具体的な文脈と状況において、この種の移動先が明示化されることも考えられる。その要因は一種の語用論的強化の結果として考えられる。では、図-6を参照しながら、以下の例文を考えてみよう。

- (23) 我上学去了。(私、学校に行くよ)
- (24) 他不在家, 上班了。(彼は家にいない、仕事に行った)
- (25) 他出差上北京了。(彼は北京に出張に行った)

図-6と図-5を比較すれば、その違いは一目瞭然である。唯一の違いは、移動の終点(目的地)が含意されたかどうかである。たとえば、(23)の移動主体である私の〈移動先〉は、〈学校〉であることは明示されている。同様に、(24)の〈彼〉の移動先は、〈仕事先〉で、(25)の〈彼の出張先〉は、〈北京〉であることがはっきりと分かる。

また、ここにあげた三つの例文は、一見して区別がないように見える。しかし、現

図-6



代中国語の中での定着度と慣用度においては、差異が見られる。例文 (23)、(24) の中の“上学”、“上班”は、現代中国語において一つのゲシュタルトとしてかなり慣用化されている。そのため、分析性は比較的に低い。一方、(25) は、(23) と (24) に比べて、定着度が低い。一つの証拠として、たとえば、前者の場合は、ほかの動詞（たとえば、“去”（行く））と書き換えることができない（*“去学”、*“去班”）、一方、後者の場合は、この種の書き換えは認められる（“去北京”）。また、〈上に、前に移動の経路〉義と違って、〈目的地へ移動〉は、ある種の方向性は見られるが、具体的には垂直方向への移動なのか、水平方向への移動なのか、あるいは両者の融合なのかは、必ずしも指定されているわけではない。

3.6.3 〈上る〉義

ここまでは、“上”のもつ〈上へ前への移動の経路〉義と〈目的地への移動〉義について検討した。現代中国語には、この二つの独立義がさらに融合して、認知的マッピングすることによって拡張された“上”の意義がある。以下の例文を見てみよう。

(26) 他第一次上台表演。(彼は初めて舞台上った)

(27) 快上车, 没时间了。(早く乗らないと、間に合わないぞ)

図-7

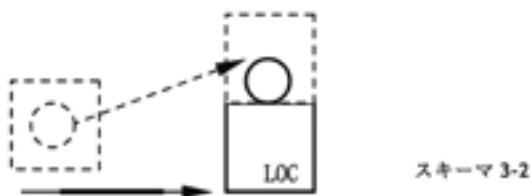


図-7で示したように、例文 (26) の移動主体（〈彼〉）は、もとの場所（背景化されているが）から、移動先の舞台の方への位置の変化が焦点化されている。同様に、(27) の（背景化している）移動主体は、場所の変化が焦点化されている。しかし、ここで注意してほしいのは、とくに (27) の場合は、TR の移動の結果は一見して LM の中に入っているように見えることである。この状況について表現するときに、空間辞“里”を用いるか、それとも“上”を用いるかは、一種のゆらぎ現象が認められる（詳しくは韓2007を参照されたい）。

また、例文 (26) の“上台”は、「舞台にあがる」を表すときに、一種のシネクドキー（類としての“台”が、種としての〈舞台〉を指す）にかかわる慣用表現として考えることができる。同様に (27) の“上车”は、「乗り物に乗る」を表すときにも、一種のシネクドキー（類としての“車”が、種としての〈自動車、列車など〉を指す）的な慣用表現と見なすことができる。しかし、後者の場合は、とくに〈自動車に乗る〉を表すとき、“上他的车（彼の車に乗る）”や“上那輛車（あの車に乗る）”のように、

合成法によってさらに複合的な構造をつくることができる。一方、前者の場合には、この種の現象は見られない。また、拡張関係をみるときに、〈上る〉義は、〈目的地へ移動〉義と〈上へ、前へ移動〉義の両方にかかわっているのが分かる。

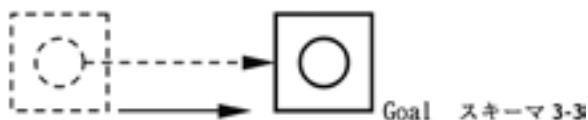
3.6.4 〈到達〉義

3.6.2節でみた“上”の〈目的地への移動〉義のイメージ・スキーマ（図-6参照）は、さらに終点焦点化によって、別の意義〈到達〉義を生成することができる。しかし、厳密にいうと、この〈到達〉義にかかわっているのは、〈目的地への移動〉義だけではなく、〈上へ、前への移動の経路〉のイメージ・スキーマ（図-5参照）も関与しているのである。つまり、空間領域における状態や位置の変化の結果が、前景化されて抽象的な概念領域へ投射されたと考えられる。以下の例文にはこのことが反映されている。

(28) 我们都是上岁数的人了。（我々はもう歳をとった人ですから）

(29) 办一个工厂至少需上万元。（工場を作るのに、最低でも数万元が必要だ）

図-8



まず、図-8に細線で示された時間軸からも分かるように、この〈到達〉義は、一種の静的関係を表している。また、これまでの場合と違って、例文(28)と(29)における“上”は、ともに抽象的な概念を表している。(28)は、文字通りに「歳をのぼる」ことはできない。そういう意味で、(29)も、実際「お金を山積みしてのぼる」ことを意味しない。むしろ、抽象的な概念領域における状態の変化の結果が〈到達〉の一種として解釈されていると言った方がよい。

しかし、この種の拡張は、けっして恣意的なものではない。普通、空間領域の中で、ある出発点から移動するとき、何らかの目的地があるのが当然のことである。〈その目的地に移動した結果〉ということが焦点化されるときに、メタファー的に〈当初の状態から新たな状態に達した〉と理解することができる。例文(28)は、時間の経過とともに、「歳を重ねてきた」ことを表している。起点領域は「若いときの状態」、終点領域は「今の（もう若くない）状態」と仮定すれば、実際の移動上の「出発点」と「終点」のもつイメージ・スキーマ構造とはかなり類似しているのがわかる。(29)も同様に解釈することができる。しかし、いずれの場合も、移動のスキーマと比較するときに、〈起点〉および〈経路〉が背景化されていることが分かる。

3.6.5 〈掲載・出演など〉義

中国語“上”のもつ意義は、決して以上のものにとどまることはない。メトニミーを介してさらなる拡張現象が見られる。次の例文の拡張関係を考えてみよう。

(30) 她上了中央电视台。(彼女は中国中央テレビに出演した)

〈到達〉義と同様、〈掲載〉義にもある種の方向性や移動する〈経路〉は前景化されていない。つまり、〈一種の方向性のある行為〉から、慣用化された〈行為〉へと拡張されているといえる。(30)の場合は、〈彼女〉は文字通りに〈中国中央テレビ局〉という場所に行ったと解釈されることはなく、時間上の隣接関係から〈彼女はテレビに出演すること〉という種の推論を介して理解される。

3.6.6 〈行為の開始〉義

(31) 一吃完斧, 两人 就开始聊上了。(ご飯を食べ終わると、二人はすぐ喋り始めた)

(32) 在十字路口 一辆汽车撞上了一辆自行车。(交差点で車は自転車にぶつかってしまった)

例文(31)と(32)における“上”の意味・用法は、共に具体的な意味からある種の文法機能(アスペクト)に変わっているといえる。つまり、ある種の内容語から機能語への拡張にかかわる文化化現象として捉えることができる。

3.6.7 〈結果達成〉義

(33) 本来没想当班长, 可谁知却当上了。(もともと班長になりたくなかった。しかし、結班長になった)

(34) 关上门了么?(ドアを閉めたのかな)

(35) 门关了好几次都关不上。(ドアを何回も閉めようと思ったが、なかなか閉められない)

例文(33)と(34)は、単なる〈行為の開始〉というより、むしろ、ある種の結果達成として再記述される。とくに、(35)からも分かるように、この種の結果達成は、動詞と動詞補部(verb complements)である“上”の間に、否定辞を入れることによって、〈結果達成〉をキャンセルすることができる¹³。しかし、〈行為の開始〉を表す(31)と(32)にはこの種のキャンセルは認められない(*“聊不上”、*“撞不上”)。したがって、本稿では、両者を基本的に区別することにする。また、三つの例文は、ともに問題の人物が、動詞を通してその〈結果達成〉をコントロールできないという点で共通している。たとえば、(33)では、問題の人物〈私〉は、もともと〈班長になろうと思っていない〉にもかかわらず、客観的な結果として、〈班長になった〉。一方、(34)は、〈ドアを閉める〉という行為そのものに対する疑問ではなく、行為自体が含意しない〈行為の結果〉に対する疑問である。その〈結果〉が達成されているかど

うかは、“上”の有無によって表現される。(35)は、そのことをはっきりと表している。なお、“上”の自動性にかかわる独立義の相関関係を図-9で示す。

図-9 “上”の自動性の意味ネットワーク



3.7 “上”の他動性

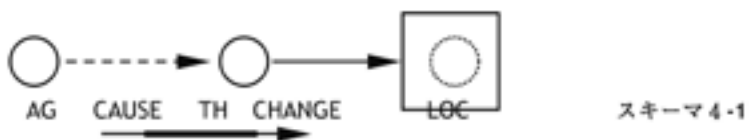
(36) 可以上菜了么？(今から料理を運ばせていただいでよろしいですか)

図-10



(37) 这台机器运转不正常、该上油了。(この機械の動きがおかしい。油を加えた方がいいよ)

図-11



(38) 先画轮廓、再上颜色。(輪郭を描いてから色を塗る)

図-12



(39) 我想把这个螺母上到螺丝上。(このナットをネジに付けたいです)

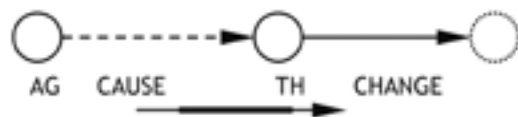
図-13



スキーマ4-3

(40) 给表上弦了么？(時計の弦を捻りましたか→時計をセットしましたか)

図-14



スキーマ4-4

例文 (36) - (40) における“上”の対応する訳語からも分かるように、すべては他動構文である。しかし、“上”のこの種他動性と前述した自動性とはまったく無関係ではない。そこにはやはりある種の連続的な拡張関係が見られる。とくに、モノの移動先は徐々に薄れていく（移動先の希薄化現象）ことに注意したい。

まず、(36) の場合、「料理の運び先」は、言語表現によって明示化されていないにもかかわらず、われわれはその「運び先」は「料理を頼んだ人が座っているところ」、デフォルト値としてそれは「テーブル」であろうと思ってこの種の表現を使っている。逆にいうと、われわれは「料理の運び先」が、「テーブル」以外のところをまったく考えていないからこの種の慣用表現は常に独立して正しく機能することが保証されているのである。日常生活におけるコミュニケーションでは、この種の省略は頻繁に起こっているのである。この種の当然と思われることが省略されなかったら、あえて会話の理解を阻害してしまう。たとえば、「?可以把菜上到桌子上了吗?」というような表現はまったく必要がない。(いわゆるグライスの量の格率「必要な情報のみ言う」)。しかし、(37) の“上油”はどうだろう。一般に、“上菜”のように単独に用いることができない。必ず「どこに油を加える」という移動先を明確に示さなければならない。また、(38) から分かるように、この種の移動先（つまり、「場所」）は、徐々に一種の「対象」としてメタファー的に解釈される。前もって描いた「輪郭」に「色を塗る」という「輪郭」は、視点によって「色を塗る」場所としても、「色を塗る」対象として解釈されうるからである。この種のゆらぎ現象は、例文 (39) においても見られる。ただ、(38) の「輪郭」に比べて、(39) の「ネジ」はより対象として解釈される可能性が高い。しかし、(40) には、この種のゆらぎ現象は認められない。「時計の弦」は完全に対象として理解されるからである。言い換えると、(40) の他動性は最も高い（より他動性のプロトタイプに近い）と考えられる。なお、ここで述べた

“上”の他動性にかかわる〈目的地へモノを運ぶ〉義、〈付ける〉義、〈意図のある行為〉義の三つの独立義は、ひとつの段階的なグレイディエンス構造をなしている。

表2

“上”の他動性のグレイディエンス		
	〈他動性のプロトタイプ〉	〈場所〉
A 「上菜」〈目的地へモノを運ぶ〉	遠い	
B 「上油」	↓	↓
C 「上颜色」〈付ける〉		
D 「上螺丝」		
E 「上弦」〈対象をセットする〉		

表2に見るように、Aの「上菜」は、〈目的地へモノを運ぶ〉義にあたるが、Bの「上油」は、「油を目的地としての機械に運ぶ」という観点ならば、〈目的地へモノを運ぶ〉義にあたるが、「油をモノとして機械のある部位に付ける」という観点ならば、「付ける」義にあたる。いわゆる一種のゆらぎ現象が見られる。同様に、Cの「上颜色」は、「色で対象としての紙を塗る」として解釈できるし、「色を場所としての紙に塗る」としても解釈できる。その意味で、Dの「上螺丝」にもこの種のゆらぎ現象が見られる。一方、Eの「上弦」には、一般に〈目的地へモノを運ぶ〉という意味は認められない。しかし、たとえば、もし、動作主は、時計の部品である「弦」を時計に「取り付けた」という具体的な文脈があれば、〈付ける〉義としても解釈できる。このような特殊の状況や場面がなければ、慣用的に「時計をセットする」として解釈される。つまり、この慣用表現は、すでにゲシュタルト的な変容を経て、定着しているといえる。

以上の拡張関係およびその動機付けを図-15に示す。なお、中国語空間辞“上”の意味ネットワークを図-16に示しておく。

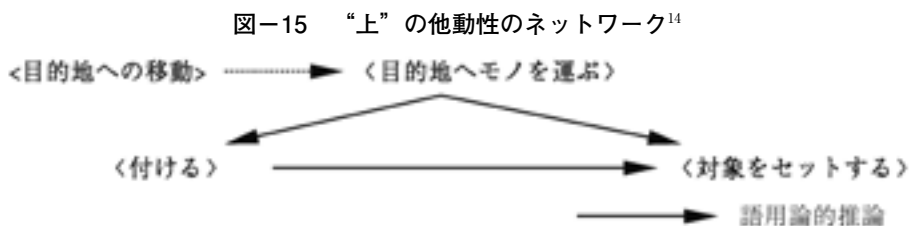


図-16 中国語空間辞“上”の意味ネットワーク



4. 空間辞意味拡張の認知的基盤及びその制約

Lakoff and Johnson 1980によれば、われわれ人間の概念体系はメタファーによって成り立っているとされる。言い換えると、メタファーは単なる言葉の綾ではなく、人間の思考や行動に密接にかかわっているものである。とくに、われわれは、直接把握できない抽象的な概念を理解するときに、より具体性の高い事物や概念を介してメタファー的に捉えることが多い。ここでいう具体性とは、とりわけ人間の身体性とどの程度でかかわっているかのことである。たとえば、われわれは、ある複雑な構造をも

つモノの全体像を把握する際に、視覚や味覚、触覚などの五感に頼って対象の大きさや味、材質などを知覚したり、今まで経験したモノと比較したりしてはじめてそのモノにかかわるイメージを作り上げることができる¹⁵。中でも、空間物理的経験はわれわれにとって身体化された最も具体性の高い部類に入っている。そのため、空間的配置関係を表す空間辞や空間表現はメタファーの基盤になっていると考えられる。

また、Langacker の認知文法によれば、空間辞は基本的に非時間関係 (atemporal relation) を表すという。日本語格助詞「に」や「で」などはそうである。しかし、英語空間前置詞は、日本語の場合と違って、単純非時間的關係のみならず、複合非時間的關係も表す¹⁶。また、3節で検討した中国語“上”の意味・用法からも分かるように、非時間的關係だけでなく、プロセスの用法まで拡張され、より複雑なカテゴリーを構成している。しかし、こういった意味拡張のプロセスで生じた差異は、恣意的ではなく、メタファーによって動機付けられうると考えられる。

図-17

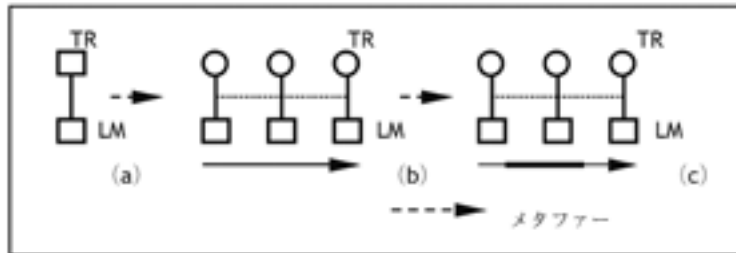


図-17の (a) は単純非時間的關係のスキーマで、日本語空間辞と対応している。(b) は複合非時間的關係のスキーマを表していて、(a) と合わせて英語空間前置詞と対応している。これに対し、(c) はプロセスのスキーマである。(b) とはスキニングの仕方 ((b) は総括的の走査、一方 (c) は連続的の走査) を除けば、かなり類似している。中国語空間辞“上”はこの三つのスキーマのいずれにも対応している。また、このことから、日本語は形式優先の言語で、中国語は意味優先の言語であるといえる。一方、英語は、この両者の間に位置する言語であるというタイポロジー的特徴を指摘できる。これは、3言語の空間辞はどこまで品詞の束縛を越えて拡張できるかという制約の問題にかかわっているものと考えられる。

5. おわりに

認知言語学では、言語の本質は意味の側面にあるという立場をとる。ここでいう意味は認知主体である人間にとって有意味であるということである¹⁸。その意味で、空間物理的経験はまさに身体化された人間にとって有意味なものであるゆえに、言語の基盤になっている。その中で、とくに上-下、前-後、左-右は三つの軸と言われて

いる。本稿は、中国語“上”の多義性にフォーカスをあて、Tyler and Evans 2001、2003で提案された「決まった手順に基づく多義説 (PRINCIPLED POLYSEMY)」という分析方法を用い、その意味拡張及び動機付けを中心に考察した。しかし、本稿のアプローチは理論的アプローチであることに注意していただきたい。心理的アプローチからの考察は今後の課題にしておきたいと思う。

[注]

- (1) ここで注意しなければならないのは、この多義説は、決してその語のすべての用法が独立義として記憶に定着されていると主張しているわけではないということである。少なくとも一部の用法は、実際の言語使用のなかで文脈から独立し、意味ネットワークに組み込まれることになると見ている。したがって、この多義説は、単義説とも区別される。
- (2) 本稿は、田中1997にしたがって、英語前置詞 over に関する先行研究を、「意味成分抽出論」(つまり、単義説、またはコア理論)と「複数図式論 (Lexical Network Model)」に分けて検討していく。
- (3) ほかの問題点は、さらに Tyler and Evans 2001 : 729を参照されたい。
- (4) 本稿で使用されている認知図式は特に断りのない限り、すべて筆者による自作図である。
- (5) このプロトタイプ義はいわゆる理論的プロトタイプであることに注意してほしい。そういう意味で、心理的プロトタイプとはどこまで合致するかは今後さらに検討することが必要である。
- (6) なお、日本語「上下」を基盤に理解される抽象的な概念について、山梨2000-169を参照されたい。英語の場合は、Lakoff and Johnson 1980などを参照されたい。
- (7) 山梨(2000)では、メトニミーの下位分類として、(i) トポニミー：空間/場所の近接関係にもとづく表現、(ii) パートニミー：部分/全体の近接関係にもとづく表現、に分けられている (*ibid* 87~90)。本稿でも、基本的にこの下位分類にしたがう。
- (8) 中国語空間辞“上”と“里”の違いは、さらに韓2007 : 149-152を参照されたい。
- (9) ここでの語用論的推論は、厳密にいうと一種のメトニミーとしても解釈される(初山・深田2003-128参照)。とくに、事態(イベント)における共起性と近接関係に関する認知主体の推論による意味変化の動機付けは、メトニミーではなく、語用論的推論を用いることにする。
- (10) ここでのパートニミーは、メトニミーの一種として考えられる。本研究において、とくに、「部分-全体」の近接関係と区別するとき、メトニミーではなく、パートニミーを用いることにする。
- (11) 「機関」及びそのメトニミー的用法は、紙幅の関係で割愛する。詳しい内容は韓2007 : 117-118参照されたい。なお、この種のプロファイル・シフトにかかわる文法化現象は、中国語だけでなく、日本語にも見られる。山梨(2000)では、現在の日本語の人称代名詞として「〈アソ系の方向表現〉：あなた、そち、そなた、その方」と「〈前後関係〉：おまえ、手前/てめえ」があげられている (*ibid* 99~103)。さらに、〈社会的上下関係〉にかかわる「上様」もこの種の文法化であると指摘されている (*ibid* 116)。
- (12) 本稿は、“上”の意味拡張及びその動機付けを中心に検討するため、“上”のもつ非対格性、非能格性に関する考察は、今後の議論に譲る。
- (13) 動詞と動詞補部のこの種の関係から、Talmy 2000では、「中国語は高度な衛星枠付け言語」であると指摘されている。
- (14) 自動性との関連でいうと、たとえば、3.6.1節で取り上げた例文(21)、(22)を再度思い出し

ていただきたい。「川の水位が上がる」や「株価が上がる」それ自体は、非情物なので自ら移動することはできない。しかし、ある種の外在的なエネルギーがあれば、それらが移動することができる。問題は、この種の外在的なエネルギーは、文には明示されていないので、何であるかは具体的な文脈や状況、あるいはデフォルト値によって補わなければならない。しかし、この節でみた“上”のいくつかの他動性にかかわる用法は、この種の外在的なエネルギー（ないしは動作主）は、比較的簡単に補うことはできる。さらにいうと、この節で検討した“上”の他動性の用法では、その外在的なエネルギーを受けた対象は、単なる場所や位置の変化にとどまらず、対象自体も物理的な変化が起こりうる。たとえば、「油を、正しくない移動先（機械の外）」に入れたり、「色を輪郭の外側に塗ったりすることも考えられるからである。もちろん、両者の間にはっきりと線を引くことはできず、一つの連続体として捉えることになる。

- (15) 例えば、英語の *grasp* や日本語の「分かる」などの語彙はこのような認知プロセスを反映している。
- (16) 英語前置詞 *over* などに動的要素（「経路」）を認めるかどうかは統一的な見解はないが、例文 (41) のいずれの場合も「経路」を表していると思われる。
- (41) a. (無線電で自分の言葉を終えて) *Over to you!*
 b. (こっちへ来て) *Over here.*
 c. (視線の移動) *See the bird over there.*
- (17) 図-17は、Langacker 1990: 128を若干修正している。なお、体裁は引用者による。
- (18) Lakoff 1987では、意味について次のように述べられている。「意味は物ではない。意味とはわれわれにとって有意義なものということに他ならない。それ自体が有意義であるというものは何もない。有意義性は、ある種の環境の中でのある種の存在として生きていく経験から生じるのである (*ibid* 354)」。

* 本稿は2007年度杏林大学大学院国際協力研究科に提出した修士論文を加筆・修正したものである。修士論文の段階では、多くの先生方にお世話になった。この場を借りて、厚く御礼申し上げたい。なお、本稿の不備はすべて筆者にある。

[主要参考文献]

- Bennet, David. 1975. *Spatial and temporal uses of English prepositions-An essay in stratificational semantics*. London: Longman.
- Brugman, C. 1981. *The story of over*. MA thesis, Dept. of Linguistics, UC Berkeley. Published. 1988, as *the story of Over: Polysemy, Semantics and tile Structure of the lexicon*. New York: Garland Press.
- 儲泽祥 2004 「汉语“在+方位短语”里方位词的隐现机制」『中国语文』第2期 112-122
- Dewell, Robert. 1994. *Over again: image-schema transformations in semantic analysis*. *Cognitive linguistics*, 5(4):351-380
- 方经民 2002 「论汉语空间区域范畴的性质和类型」『世界汉语教学』第3期 37-48
- Fauconnier, G. 1994. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge Univ. Press
- Goldberg, A.E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Univ. of Chicago Press.

- 韓涛2007『空間認知と中国語空間辞「上」の意味研究－認知言語学の原理による空間辞の多義性に関する分析を中心に－』修士論文 杏林大学大学院 国際協力研究科
- 保坂律子・郭雲輝 2000「名詞を場所化する方位詞“上”と“里”」『中国語学』247期 233-249
- Johnson, M. 1987. *The Body in the Mind – The Bodily of Meaning, Imagination, and Reason*. Univ. of Chicago Press.
- Kreiter, Anatol. 1997 Multiple levels of schematization: a study in the conceptualization of space. *Cognitive Linguistics*, 8(4): 291-325
- Lakoff, George, and Mark Johnson 1980 *Metaphors we live by*. Chicago: The University of Chicago Press. [渡辺昇一他(訳) 1986『レトリックと人生』東京：大修館]
- Lakoff, George. 1987 *Woman, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: The University of Chicago Press. [池上嘉彦 河上誓作他(訳) 1993『認知意味論』東京：紀伊国書店]
- Lakoff, George. 1990 The invariance hypothesis: Is abstract reason based on image-schemas? *Cognitive Linguistics*1 (1): 39-74 [杉本孝司訳 2000「不変性仮説—抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか? 坂原茂(編)2000『認知言語学の発展』東京：ひつじ書房]
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of cognitive grammar, Vol.1. Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1993 “Reference-point Constructions,” *Cognitive Linguistics*, No.4, No.1, pp.1-38
- Langacker, Ronald W. 2000 A dynamic usage-based model. In *Usage-based model of language*, ed. Michael Barlow and Susanne Kemmer. Stanford, Calif: CSLI Publications. [坪井栄治郎訳「動的使用 依拠モデル」坂原茂(編) 2000『認知言語学の発展』東京：ひつじ書房]
- 刘宁生 1994「汉语怎样表达物体的空间关系」『中国语文』第3期169-179
- 呂淑湘 1992『中国語用例辞典』牛島徳次(監訳) 菱沼透他(訳) 東方書店
- Mandler, Jean 1992. How to build a baby: Conceptual primitives. *Psychological Review*, 99: 587-604)
- 丸尾誠 2004「中国語の場所詞について－モノ・トコロという観点から－」『言語文化論文集』第25巻 第2号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 151-166
- 初山洋介 1992「多義語の分析——空間から時間へ」カッケンブッシュ寛子他(編)『日本語研究と日本語教育』185-199 名古屋：名古屋大学出版会
- 初山洋介 1993「多義語分析の方法—多義的別義の認定をめぐって—」『日本語・日本文化論集』1号 pp35-57 名古屋大学留学センター
- 初山洋介 1995「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際——意味転用の一方向性：空間から時間へ」『東京大学言語学論集』14：621-639 東京大学文学部言語学研究室
- 初山洋介 2001「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」山梨正明(編)『認知言語学論考』1：29-58 東京：ひつじ書房
- 初山洋介 2003「第3章 意味の拡張」「第4章 多義性」『認知意味論』松本曜(編)大修館書店
- Sandra, Dominiek, and Sally Rice. 1995. Network analyses of prepositional meaning : mirroring whose mind – the linguist’s or the language user’s ? *Cognitive linguistics*, 6(1): 89-130
- 田中茂範 1990『認知意味論：英語動詞の多義構造』東京：三友社出版

- 田中茂範 1997 「空間表現の意味と機能」 田中茂範・松本曜 『空間と移動の表現』 1-123 東京：研究社出版
- Talmy, Leonard. 2000. A Typology of Event Integration. *Toward a Cognitive Semantics, vol. II : Typology and Process in Concept structuring*, 213-288. Cambridge, MA: The MIT Press.
- 谷口一美 1998 「非対格性再考：その概念的基盤と文法構文との関わり」 JELS-15 231-240
- 谷口一美 2003 『認知意味論の新展開－メタファーとメトニミー』 研究社
- Taylor, John R. 1989 *Linguistics categorization: Prototypes in linguistic theory*. Oxford: Clarendon Press. [辻幸夫訳1996 『認知言語学のための14章』 東京：紀伊国屋書店]
- Tyler, Andrea and Vyvyan Evans 2001 Reconsidering prepositional polysemy networks: the case of over. *Language*, 77(4): 724-765
- Tyler, Andrea and Vyvyan Evans 2003 *The Semantics of English Prepositions*. [国広哲弥（監訳）木村哲也（訳） 2005 『英語前置詞の意味論』 研究社]
- Vandelosie, Claude. 1990. Representation, prototypes, and centrality. In *Meanings and prototypes: Studies in linguistic categorization*, ed. Savas L. Tsohatzidis, 403-437. London: Routledge.
- Yamanasi, masa-aki. 1996 "Spatial Cognition and Egocentric Distance in Metaphor", *Poetica*, Vol.46, pp.1-14
- 山梨正明 1995 『認知文法論』 ひつじ書房
- 山梨正明 2000 『認知言語学原理』 くろしお出版
- 山梨正明 2001 「ことばの科学の認知言語学的シナリオ」 『認知言語学論考 NO1』 ひつじ書房